アルフレッド・テニスン「トンブクトゥ」と学生詩の終焉

田代尚路

1. はじめに

ケンブリッジ大学トリニティ・コレッジの学生であった若き日の詩人テニスン（Alfred Tennyson, 1809-92）[1]が、ケンブリッジ懇話会（Cambridge Conversazione Society）の会員に選出されたのは、1829年10月のことである[2]。ここでは便宜的に「懇話会」と訳したが、“conversazione”は、文学・芸術・哲学等についての議論を行う集会を意味する。会員がキリストの弟子の数と同じ12人に限定されていたことから「使徒団」（Apostles）とも呼ばれ、主としてトリニティ・コレッジ所属の学生により構成されていた。プラトン（Plato, 427BC-347BC）および、ロマン派詩人であるワーズワス（William Wordsworth, 1770-1850）とコールリッジ（Samuel Taylor Coleridge, 1772-1834）を信奉する者たちの集まりであり[3]、また文学と政治を不可分なものとして捉え、社会変革に向けて文学が果たしうる役割を探究する場でもあったという[4]。当時、文学（とりわけ詩）は知的な若者たちの言説空間において、中心的位置を占めていたのである。テニスンはあまり熱心な会員ではなかったようだが、そこで培われた人間関係は彼の詩作に大きな影響を与えた。特に重要なのはハラム（Arthur Henry Hallam, 1811-33）[5]との交友で、ハラムは持ち前の批評能力を生かし、1831年にはテニスンを新たな時代の有力な詩人として高く評価する論考「現代詩の特質とアルフレッド・テニスンの抒情詩について」（“On Some of the Characteristics of Modern Poetry, and on the Lyrical Poems of Alfred Tennyson”）を『イングリッシュマンズ・マガジン』（*Englishman's Magazine*）に発表している。

本論文では、使徒団の文学史的・思想史的位置を精査する試みの一環として、テニスンの初期詩「トンブクトゥ」（“Timbuctoo”, 1829）に着目する。1829年6月にケンブリッジ総長賞（これについては後述する）を受賞している事実からもわかるように、テニスンの使徒会入会前の作品であるが、すでに執筆の時点でテニスンと複数の使徒団会員（および、会員に連なる人々）の交友関係は深まっていた[6]。その意味におい

て、「トンブクトゥ」をテニスンと使徒団の関わりの出発点におかれるべき作品として捉えることが可能である。

何かの出発を画する作品ということは、同時に、何かの終焉を物語る作品ということにもなる。そもそも「トンブクトゥ」は終焉—幻の都市に寄せる想像力の終焉—をめぐる詩であるが、テニスンにとって先行詩人の模倣期（いわば、詩人としての準備期間）の終焉を告げる作品でもある。テニスン自身、「「恋人の物語」と「トンブクトゥ」では、いかなる詩人の作品も模倣していないし、私の認識するかぎり、「トンブクトゥ」の執筆時期以降、私の詩に模倣的なものはない」と語ったと伝えられている[7]。本論文では、同時代のケンブリッジの学生詩に着目することで、テニスンが模倣期に身をおいていた文学的環境の特質を明らかにしつつ、そこからの脱却という視点から「トンブクトゥ」について考察したい。

2. ケンブリッジ総長賞とテニスン「トンブクトゥ」（1829）

ケンブリッジ総長賞は、テニスンの受賞から遡ること 16 年前の 1813 年に創設された英詩創作コンテストである。応募資格を持つのはケンブリッジ大学の学生で、事前に提示される兼題に沿って詩を執筆・応募する方式をとる。毎回の応募者数について正確な数字は不明であるが、「トンブクトゥ」が兼題となった 1829 年には 30 人程度が応募したのではないかと推測されている[8]。受賞者一覧にはテニスンのほかマコーリー（Thomas Babington Macaulay, 1800-59）やブルワー＝リットン（Edward Bulwer-Lytton, 1803-73）の名前があり、後に文筆で名を馳せることになるケンブリッジ出身者が通過した登竜門としての機能を（結果的には）果たしたという見方もできる。

もっとも、テニスンが自身の作品を含む総長賞受賞作全般について「正確には「詩」ではない[9]」と指摘していることからも察せられるとおり、若書きの作品が多く、個々の詩の完成度は必ずしも高いとはいえない。そのせいもあってか、総長賞自体あるいは受賞作品に関する先行研究も特にまとまったものは存在せず、ケンブリッジ大学における文学の営みを通史的に扱うチェイニーの『ケンブリッジにおける文学史』や、テニスンの伝記・研究書において軽く言及されるにとどまっている。

テニスンと総長賞の関わりについても、これまで本格的には検討されてこなかった。自作の詩「アルマゲドン」（“Armageddon”, 1824）をパッチワーク的に再利用した執筆

プロセスから、総長賞への応募が自発的な行為ではないことをテニスンの子であるハラム・テニスン（Hallam Tennyson, 1852-1928）が指摘しており[10]、さらに「父親からの圧力を受けて、非常に不本意ながらも応募した[11]」とする（ハラム・テニスンの子）チャールズ・テニスン（Charles Tennyson, 1879-1977）の発言も、総長賞の文脈から「トンブクトゥ」を捉え直す試みに待ったをかけてくる[12]。加えて、総長賞の韻律規定（英雄対句）を無視し、無韻詩として仕上げた大胆不敵さも、「不本意論」を補強する格好の材料となる。しかしながら、詩人の子と孫による言及を、額面どおりに受け取ってよいのか疑問が残る。テニスン家の一員として詩人テニスンの顕彰を行った人たちである。もちろん、テニスン本人が、総長賞の個人史的意義を過小評価する発言を実際に行ったことはあったのかもしれないが、賞への無関心な態度を装ういかにも詩人らしいポーズを、直ちに超俗的詩人としてのテニスン像に回収してしまう二人の意図には注意を払うべきだろう。

テニスンの創作活動を追うかぎり、1829 年の「トンブクトゥ」受賞に至るまでの過程において、総長賞を十分に意識していた形跡は確認できる。1828 年の兼題「ナポレオン・ボナパルトによるロシア侵攻」（“The Invasion of Russia by Napoleon Buonaparte”）に則してテニスンが同題の詩を書いていることについてはすでに指摘があるし[13]、さらにその前年の 1827 年には、その年の総長賞の兼題「ドルイド」（“The Druids”）に合わせるかのように「ドルイドの予言」（“The Druid’s Prophecies”）という作品を発表している。状況証拠的には、1827 年から 29 年にかけて、テニスンが総長賞をめぐる文学的環境に自ら進んで身をおいていたように見える。さらにいえば、リーヴァイが詳かにしているように、テニスンの指導教員であったヒューウェル（William Whewell, 1794-1866）も 1814 年の総長賞受賞者である[14]。この師弟関係が、テニスンの総長賞応募に影響を及ぼした可能性も無視できない。

ここで、トンブクトゥが 1829 年の総長賞の兼題に選ばれた背景についても簡単に触れておこう[15]。トンブクトゥとは、サハラ砂漠の南端、現在のマリ共和国に位置する交易都市である。アラブ世界とサハラ以南のいわゆる「サブサハラアフリカ」をつなぐ中継点として古くから栄え、15 世紀以降は、未踏の黄金都市として西欧人の幻想を刺激してきた。19 世紀に入ると主としてイギリスとフランスが商業上の利得を期待してトンブクトゥへの探検を積極的に支援するようになり、1826 年にスコットランド出身のレ

ング（Alexander Gordon Laing, 1794-1826）、1828 年にフランス人のカイエ（René Caillié, 1799-1838）が到達を果たしている。レングはトンブクトゥから帰国の途についてまもなく殺害されてしまったため本人の記録は残っていないが、カイエは無事フランスに帰国し、1830 年には旅行記を出版している。トンブクトゥが総長賞の兼題となったのは、まさにトンブクトゥを覆っていた神秘のヴェールがいつ剥がされるか、多くの人たちが固唾を呑んで見守っていた時期だったのである。

なお、同時代のトンブクトゥをめぐる言説は、西欧中心主義的な「発見」の物語に回収されがちであるが、テニスンは「トンブクトゥ」において発見の図式自体は踏襲するものの、視点次第でそれが破滅や幻滅になりうることを示している。想像力の働きを重視する詩人にとって、トンブクトゥの実像が露わになるのは必ずしも望ましいことではない。幻想の中のトンブクトゥは、幾重にも城壁やドームが立ち並び、ピラミッドやミナレットも聳える大都会だったのに対し、現実のトンブクトゥは「屋根の低い、泥づくりの塀に取り囲まれた、野蛮人の居住地」（244 行）にすぎないだろうとテニスンは踏んだのである[16]。だとすれば、発見がもたらすのは、それまで想像力によって培われてきた壮麗なイメージの終焉にほかならない。トンブクトゥは懸賞金つきで探検家が目指す対象となっていたため、壮麗な想像図がおそらくは興醒めな実像に置き換えられるのは時間の問題だった。テニスンはそのような切迫した時間に身をおくなかで、「トンブクトゥ」を執筆・応募したのである。

3. ケンブリッジの学生詩と想像力の働き

では果たして、「トンブクトゥ」執筆当時のテニスンは、どのような文学的環境に身をおいていたのだろうか。19 世紀ケンブリッジ大学の「韻文文化」（verse culture）については、メイゼルの研究が詳しい。メイゼルは特に軽めの内容をもつ「社交詩」（vers de société）に焦点を当て、この種の詩を書くことが紳士としての自己成型と関係していたことを明らかにしている。巧みに脚韻を踏んだユーモラスな詩は、学生たちが自分自身の教養や洗練、さらには貴族性をも示す機能をもっていたというのである[17]。

さらにメイゼルは、ケンブリッジの学生たちが書いた詩について、自分自身の「加齢」や「時間の経過」についての懸念が見られがちであることを指摘し、その背景要因としてケンブリッジにおける古典教育を挙げている。

ケンブリッジの韻文に反復して見られる「加齢」と「時間の経過」についての懸念は、個人的な不安の表現であると同時に、ケンブリッジの古典カリキュラムが形成したものである。ケンブリッジの韻文作者は、時間の経過の早さについてのウェルギリウスやホラティウスのよく知られた忠告を再活用することが多かった（「時は過ぎゆく」、「その日を掴め」、「死を想え」のトポス。ホラティウスの頌歌 1. 4 にある「人生の短い総和」など）[18]。

つまり、ウェルギリウス（Publius Vergilius Maro, 70 BC-19 BC）やホラティウス（Quintus Horatius Flaccus, 65 BC-8 BC）の作品に触れる中で、学生たちは文学的定型表現（トポス）を身につけ、それを詩の創作に生かしたというわけである。その実例としては、テニスンとも親交が深かった使徒会員ミルンズ（Richard Monckton Milnes, 1809-85）のソネット「長らく大陸に滞在したのち、ケンブリッジを再訪して（I）」（“On Revisiting Cambridge, After a Long Absence on the Continent [I]”, 1838）が紹介されている。

それなりの数の、それなりに美しい、
海外の土地に滞在してきた。私の観察力は、
怠惰でも鈍麻でもないだろう。だが、離れて久しい中庭を
いまだにもっとも美しいと私は思うのだ。
明らかに以前に増して。（1-5 行）

30 代に差し掛かろうというミルンズが、かつてのケンブリッジでの学生生活を懐かしむ内容の詩である。特に重要なのは、時を経てあらためて目の当たりにするケンブリッジは、かつて学生だった時に見たケンブリッジよりも美しく見えるという一節だ。ここでミルンズは、学生時代を価値の劣る時期として提示し、壮年となった現在を賛美しているのではない。ミルンズのなかで蓄積された外国での経験と学生時代の甘美な記憶が、ケンブリッジに対する愛着を強めたということを示すために、あえてこのような修辞的表現が選ばれているのである。現在の肯定というよりは、過ぎ去った時間の価値を訴える作品であり、その点において確かに古典文学における定型表現と接続されうるものといえる[19]。

しかし同時に、古典文学と結びつけるだけでよいのかという疑問も湧く。ロマン派詩人、とりわけミルンズの学生時代からさかのぼること約 40 年前に同じケンブリッジ大学で学んだワーズワスらが展開した詩学の系譜上にある点も見逃すことができないのではないだろうか。

例えば、ミルンズのソネットの横にワーズワスの「ティンターン修道院上流数マイルの地で」(“Lines Written a Few Miles above Tintern Abbey”, 1798)の一節を並べてみよう。

長らく離れていたが、
これらの美しいイメージは
目が見えない人にとっての風景のようなものではなかった。
しばしば、自分ひとりの部屋のなかで
街の喧騒に囲まれていても、私はこれらのおかげで
心が倦んだときも、甘い感覚を味わうことができた[20]。 (23-28 行)

ここではワーズワスがワイ河畔を再訪した時の感慨が述べられている。彼も古典文学を学んだ訳であるから、この一説も「時は過ぎゆく」というトポスの影響下にあると指摘することは可能であろうが、時の経過に「記憶」や「想像力」といった装置を取り込んだのがワーズワス、ひいてはロマン派の詩の特徴であり、それがミルンズにも強い影響を与えたものと思われる。過ぎ去った時間を単に哀惜するのではなく過去を現前させ、そこに甘美な輝きを添える記憶と想像力の働きを、ミルンズはロマン派から吸収したのである。

同様に、総長賞受賞作にも、このような記憶と想像力の詩学が入り込んでいる。例えば、ワーズワスの甥にあたるクリストファー・ワーズワス(Christopher Wordsworth, 1807-1885)は、1827 年に「ドルイド」により総長賞を受賞しているが、彼の作品に伯父ウィリアムの影響が顕著に見られるのは関係性を考えれば自然なことだろう[21]。クリストファーと同名の父、ウィリアムの弟クリストファー・ワーズワス(Christopher Wordsworth, 1774-1846)は 1820 年よりトリニティ・コレッジの学寮長をつとめており、ウィリアムも定期的にコレッジを訪問しては、彼の詩の愛好者を増やしていたという[22]。なお、ドルイ

ドとは、古代ケルト人の支配階層をなした聖職者集団である。クリストファー・ワーズワスは、この詩において紀元1世紀のローマによるモナ（現在のアングルジー島）侵攻の様子を描き出した。ローマの手で蹂躙され廃墟となり、いまは動物たちの住処となっているモナに呼びかけて、詩人は以下のように語る。

嘆くな！　より甘美なことではないか
生き物の跋扈する霞の向こうに優美な世界を見るのは。
ヴェールを持ち上げ、遠い光景、
ありし日の夢の舞台を眺めることは。
　船乗りたちが舳先から身を乗り出して、
遠い我が家の庭の花々、風に揺られる木々を見るのと同じ。
緑の波間で、慕わしく視界に浮かぶ景色は、
実像よりも甘美なものだ[23]。（66-73行）

実際のモナよりも、想像の中に立ち現れるモナの方が甘美であり、それは船乗りの脳裏に浮かぶ記憶の中の故郷が、実像よりも甘美なのと同様だというのである。

これと類似した展開は、1823年に総長賞を獲得したプリード（Winthrop Mackworth Praed, 1802-39）の「オーストラレイジア」（“Australasia”）という作品にも見られる。冒頭部分において、当時イギリスの流刑地としての役割を果たしていたオーストラリアに船で移送される囚人たちに焦点が当てられるのだが、特に窃盗団の一員だった田舎育ちの若者に注目する場面では、詩人はその若者の内面に入り込み、彼が故郷を恋い慕う心情に肉薄する。

おお！　あの何気ない眼差しから、
記憶がぼやけつつある日々を夢想していることが想像できる。
山の上で素朴に育てられ、
来る日も来る日も、父親の鋤の手入れをし、
日中の労苦と、夜間のくつろぎと、
清廉な生活と、おだやかな心とで幸福だった。

おお、そうだ！　いま彼は過去を振り返り、
多くのやさしい者たちと、美しい景色を思い出している。
［中略］
これらは夢にすぎない―しかし、幸福な夢だ。
なぜ幸福な夢と悲惨な運命が混じり合うのか。
［中略］
美しい大地よ！　その静寂な土地で、
身を滅ぼした者たちが、その汚点を忘却することを願う。
美しい大地よ！　砂漠と森、荒々しい岩、森の中の平坦な土地が
　　入り混じる大地よ！
私はおまえを眺める、ちょうどイスラム教徒が
預言者の本に記された幸福な島々を想像するように。（55-88 行）

犯罪に手を染めた若者にも、美しい故郷と心温まる過去の記憶があることを詩人は共感的に語り、オーストラリアという新天地で彼が幸福な生活を歩みはじめることを願う。これは、若者の中で、美化された過去の記憶が悲惨な現実をいやし、美しい未来を生み出す糧となることを期待するものといえるだろう。さらに、詩人がオーストラリアに寄せる期待が、幸福な島々を想像するイスラム教徒の願いにたとえられる。預言者の本に記された幸福な島々というのは、空想上の楽園にちがいない。その意味において、現実のオーストラリアが若者にとって必ずしも安心できる場所ではない可能性が暗示されているのかもしれない。ただ、それでもなおプリードは若者の新たな門出を祝し、イギリスであやまちを犯した者に赦しと幸福を与える場所として、オーストラリアの懐深さを夢想するのである。

最後に、テニスンと同時に 1829 年の総長賞に応募したハラムの詩「トンブクトゥ」を紹介しよう。ハラムは、冒頭にエピグラフとして、ワーズワスの「訪れなかったヤロー」（“Yarrow Unvisited”, 1803）の一節を掲げている。

ヤローの流れは、見られないまま、知られないままであれ。
　そうあるべきだ。さもなければ、私たちは後悔するであろう。

私たちには、私たちの想像図がある。
　ああ！　なぜそれを取り消さなくてはいけないのか？

1803 年のスコットランド旅行中、ワーズワスと妹のドロシー（Dorothy Wordsworth, 1771-1855）は古くからバラッド（物語詩）の中で歌われてきたヤロー川の近くにさしかかったが、時間の都合により実際に訪れることは諦めた。ワーズワスはこのエピソードを、ヤロー川に寄せる想像力を守るためにヤロー川を訪ねなかったと読み替えて詩のなかで提示する。それにならうかたちでハラムも「トンブクトゥ」では、実像よりもそこに差し向ける想像力に重きをおく展開を採用している[24]。ハラムは、壮麗なトンブクトゥの想像図を描き出した後で、以下のように述べるのである。

しかし、それらは夢だ。よい働きをするとはいえ、
それらは夢であり、あるべき場所は夜だ。
永遠にそのようであれ！
「感情がおだやかに導く」気分こそが
おまえが示す空間であれ。
群集、騒乱、権力に虐げられる奴隷たちの悲しげな表情から逃避し、
おだやかな心の持ち主によってのみ見られ、愛されるがよい[25]。（191-98 行）

括弧の部分（「感情がおだやかに導く」）は、ワーズワスの「ティンターン修道院上流数マイルの地で」からの引用である。テニスンがトンブクトゥの実像を「屋根の低い、泥づくりの塀に取り囲まれた、野蛮人の居住地」と想像したのと同様に、ハラムはそこが専制君主の支配する空間であることを予感する。「永遠にそのようにあれ！」といっておだやかな想像力の世界が今後もずっと保護されることを願いはするものの、それは西欧人によるトンブクトゥ到達間近という現状を踏まえ、いつかは覚めてしまう夢、逃避的な願望であることが示唆されるのである。

ミルンズのソネット、総長賞受賞作 2 篇、さらには総長賞こそ逃したもののテニスンによる受賞作と極めて似た展開をもつハラムの「トンブクトゥ」と順繰りに焦点を当て、背後にワーズワス的な想像力の詩学が働いていることを確認した。なにぶん（ミルン

ズのソネットを除けば)20 歳前後の若者たちの作品であるから、ロマン派の詩学が既成の装置、定型的なフォーマットとして安易に取り入れられてしまっているきらいもあるが、このような同時代のケンブリッジの作品群の中に位置づけると、テニスンの「トンブクトゥ」も時代と環境の産物のように見えてくる。少なくとも、トンブクトゥの現状よりも想像図に軍配を上げ、来るべき発見に幻滅を予感する展開については、テニスン独自の発想というより、ケンブリッジの知的な若者たちが当時共有していた詩的感性に基づくものといえそうである。とはいえ、テニスンの「トンブクトゥ」を学生詩の範疇において捉えるだけでよいのかという疑問も生じてくる。学生詩から逸脱する要素も無視できないからである。

4.「トンブクトゥ」と学生詩の終焉

先述のとおり、テニスンは「トンブクトゥ」執筆にあたり、約 5 年前に書いた自作の詩「アルマゲドン」を大規模に自己引用した。リックスによれば、テニスンの草稿 T. Nbk 18 上の「アルマゲドン」の詩行のうちのおよそ 120 行が、ほぼそのまま「トンブクトゥ」において流用されている[26]。「トンブクトゥ」は全 248 行であるから、ほぼ半分が「アルマゲドン」からの再利用なのだ。

「アルマゲドン」は、世界の終末を描く作品である。そもそもアルマゲドンとは新約聖書の「黙示録」に登場する地名で、汚れた霊が地上の王たちを集結させた場所である。転じて、最後の審判の日における、善と悪の最終戦争を意味するようになった。この作品において、詩人は山の頂上にたち、熾天使の助力を得て、地上が焼き尽くされる世界の終末を見届ける。その過程において、詩人は自分の魂が神々しいほどに拡大し、五官(とりわけ視覚と聴覚)が人間の限界を超えて鋭敏になるのを感じる。

不完全な感覚のひとつひとつが
瞬間的な閃光によって、
身を震わすほど鮮明、鋭敏になった。
暗い大地にちらばる極小の穀粒、
月の白い都市、その幅全体がオパール色に
照り輝く月の小さい湖、

さすらう雲が露を降らすことのない月の銀色の丘、
音を響かせたことも、誰も降りていったこともない月の黒い窪地、
そうしたものを私は見たのだった。（II. 27-35 行）

詩人自身、鋭敏な感覚を持つことになった自分自身に対して驚異の念を抱くのであるが、このような超人的な感覚が以下のような終末の光景を想像のうちに見るという体験を（詩の展開上は）可能にする。

見るがよい！　夜の相貌が変化した。
地獄の煙の煤けた覆いが、
虚ろで、すべてを消却する、水気のない雲をもって
眼下の平地を巨大なクレーターにした後で、
地上を離れて上昇し、
密度の濃い、乾燥した、途方もなく大きい塊をなして
遠く北の方角へと動いていった。（IV. 2-8 行）

ユダヤ・キリスト教の枠組みにおいて未来に起こるとされる世界の終末を描き出すテニスンの想像力は荒唐無稽に読めるが、実のところ、総長賞の文脈から大きく外れたものともいえない。総長賞は兼題として、「ポンペイ」（“Pompeii”, 1818）、「パルミラ」（Palmyra”, 1822）、「アテネ」（“Athens”, 1824）、「ヴェネツィア」（“Venice”, 1826）、「ドルイド」（1827）など、破滅や荒廃を経験した場所を積極的に選んできた。ここでは、「ポンペイ」を題材とした作品で総長賞を獲得したマコーリーの例を見てみよう。西暦79年、ヴェスヴィオ火山の噴火により壊滅した古代都市の終焉について、マコーリーは次のように描写する。

時が到来した。今まさに、硫黄の煙が
その経帷子でポンペイを包み込み、
カンパーニアの紺碧の空高く、
暗く、果てしない天蓋を広げている。

［中略］
どれほど凶暴に、赤々と、壮大に、
昼日中の暗闇に光が現れ出たか、おわかりか。
残忍なヴェスヴィオ山が山裾に
炎と燃えあがる石の塊を降らし、
その灼熱の山容から青白い地獄の稲妻を散らし、
地底から生じた流れ星で天空を飾り立てたときに。（111-50 行）

過去に栄えた帝国や都市が迎えた終焉について記述するのは、1776 年から 89 年にかけて出版されたギボン（Edward Gibbon, 1737-94）の『ローマ帝国衰亡史』（*The History of the Decline and Fall of the Roman Empire*）の例からもわかるように、18 世紀以来の流行だった。イギリスもやがて衰退の時を迎えるのではないかという不安が、勃興・成長・衰退というサイクルをたどった社会への関心を招き寄せた[27]。テニスンの「アルマゲドン」は過去の文明の終焉を描くものでこそないものの、同様のモチーフを未来に投影させたものとして受け取ることも可能である[28]。その見地に立つなら、「アルマゲドン」を学生詩（あるいは、総長賞受賞詩）の範囲内に位置づけられる詩として捉えたとしてもさほど支障はない。

では、テニスンが「アルマゲドン」を改編することで完成させた「トンブクトゥ」については、どのようなことがいえるのだろうか。トンブクトゥの来るべき「発見」が、これまでトンブクトゥに向けられてきた想像力の終焉をもたらすことが予期されている点において、「トンブクトゥ」においても「アルマゲドン」に見られた終焉のモチーフがゆるやかに継承されていると解釈することができる。しかし同時に、「アルマゲドン」やマコーリーの「ポンペイ」に見られるような、終焉をしかと見届けようとする想像力のありかたとは異なる意識が、「トンブクトゥ」のなかで顕著に働いていることにも気づかされる。

人の子よ、
その透きとおる流れが暗闇から噴出し、
トンブクトゥの銀色の街並みをめぐって
水面にゆらぐ円屋根や、

立派な椰子の生い茂る庭や、
鐘の甘美な音色が漂うパゴダや、
整然と立ち並ぶ橄欖石のオベリスク、
ミナレットや塔を映しゆく
あの川が見えるか？　そうだ！　あの川は流れ去り、
私の都市の写像を
世界中に運んでいく重みに耐えかねて
砂漠のなかへと消え去ってしまうではないか。
おお都市よ、おお玉座よ！　私はそこにおいて
すべてのものの目に美の神秘となるべく育てられたが、
この栄光に満ちた家を
熱情に燃える「発見」に引き渡す日は近い。（224-40行）

これは「アルマゲドン」には見られない「トンブクトゥ」独自の一節で、想像力を司る熾天使が詩人に向けて発する言葉である。擬人化された「発見」によって、近々トンブクトゥの壮麗な想像図が失われることが予測されている。その点においては、「アルマゲドン」の終末論的時間意識を引き継ぐものであるが、話はそれだけに収まるのではなく、想像力自体が決して堅牢なものではないことも示唆されている。トンブクトゥの街のなかをめぐる川は、水面に荘厳な景色を映しながら流れるものの、最終的にトンブクトゥの写像を「世界中に運んでいく重みに耐えかねて」砂漠に吸収されてしまうのである。これは当時、トンブクトゥの南を流れるニジェール川について、海に流れ出るのではなく、砂漠の地面のなかに消滅するという見方があったことを反映するものとされているが[29]、同時に個人の想像力が他者に広く共有されにくいものであることを暗示しているようにも読める。この時期のテニスンにとって想像力は強固な構築物ではなく、はかないもの、移ろいやすいものなのだ。ここからは、「アルマゲドン」やマコーリーの「ポンペイ」のように終末のヴィジョンを意気揚々と提示するのではなく、個人の想像力の限界を自認する詩人の姿が浮かび上がってくる。これは、テニスンが「美」の世界に隠棲する詩人像に批判を加えた「芸術宮」（“The Palace of Art”, 1832）を先取りする展開である。

さらにいうと、テニスンはここで、先行詩人の作品を安易に模倣する（つまり、自作に「写像」として反映させる）ことで成立する学生詩の流れからの離脱を表明しているのではないだろうか。ハラムが「トンブクトゥ」のエピグラフとしてワーズワスの詩を選んだことはすでに指摘した。1829 年以前の総長賞受賞作においてもエピグラフが掲げられている作品が散見されるが、そこで選ばれているのは古典詩人・作家としてはアイスキュロス（Aeschylus, 525BC-456BC）やホラティウスら、英詩人としてはケンブリッジ大学の先達であるスペンサー（Edmund Spenser, c.1552-1599）、ミルトン（John Milton, 1608-74）、バイロン（George Gordon Byron, 1788-1824）からの一節である。エピグラフひとつ取り上げてみても、そこには学生たちがケンブリッジの詩の伝統に寄せる意識が充満しているといえる。そのような強烈な自意識（あるいは、自校意識）を批判するかのように、テニスンは「トンブクトゥ」の冒頭に、次のような一節をおいている。

獅子が出没するあの内陸の奥深くにあるのは、
高邁な企ての目的地である神秘都市。　　チャップマン

このチャップマンとは、ジョージ・チャップマン（George Chapman, 1559-1634）を指す。この人物がケンブリッジ大学ではなくオックスフォード大学の出身者であることがまず想起されるが、それより興味深いのは、ここに「引用」されたチャップマンの詩句は実際には存在しないということである。つまり、テニスンはチャップマン作と称する詩句を（おそらくは自らの手で）捏造したのだ。

トンティプラフォルによれば、この捏造されたチャップマンの引用が示唆するのは、この詩に横溢するロマン派第二世代の詩人ジョン・キーツ（John Keats, 1795-1821）からの影響だという[30]。確かにキーツの「チャップマン訳のホメロスをはじめて読んで」（“On First Looking into Chapman’s Homer”, 1816）は「トンブクトゥ」と同じく発見をモチーフにしており、チャップマン訳のホメロスを読んだときの感動が、西欧人による地理的発見の衝撃と結びつけられている作品である。さらに両者には、黄金郷（エル・ドラード）や西方の島々に寄せる想像力という共通点が見られる。ただ、トンティプラフォルの解釈には概ね同意しつつも、同時にこの引用が本来の意味における引用では

ないという点にこだわってみたい。ここから、先行詩人の作品を手軽に引用・参照する学生詩の構造の解体を試みるテニスンの企図が浮かび上がってくるように思われるからである。

総長賞受賞作に視点を戻そう。1813年の第1回から、テニスンが受賞した1829年の第17回までの受賞作17篇には、ケンブリッジにゆかりのある大詩人（スペンサー、ミルトン、バイロン、ワーズワス）の作品のみならず、過去の受賞作の引用・参照もさかんに見られる。例えば、1826 年の総長賞受賞作であるブロックハースト（Joseph Samner Brockhurst）の「ヴェネツィア」は、以下のようにはじまる。

「時」の霊よ！　雲ひとつない真夜中、
憂鬱な月が、そのぼんやりとした光で
ローマを―美しく荒廃する冷たいアテネを、
シリアの砂漠に広がる、死者たちの悲しい街である
パルミラの崩れゆく神殿を包むのを眺めることを好む者よ！　（1-5 行）

このわずか 5 行の間に、詩人は過去の総長賞受賞作、すなわちロング（Charles Edward Long）作「帝政下および教皇期のローマ」（“Imperial and Papal Rome”, 1818）、プリード作「アテネ」（1824）、ブライト（John Henry Bright）作「パルミラ」（1822）の軌跡を器用にたどっている。これは総長賞のコンテクストを意識してブロックハーストが詩作をしたことの証左となるだろう。

さらに、ギリシアからヴェネツィアに運ばれた彫刻についての一節も見られるが、これは前年の 1825 年に総長賞を獲得したブルワー＝リットンの「彫刻」（“Sculpture”）を想起させるものである。

そして、天上的な姿をもつ数多の大理石の像が、
［中略］
生き生きとした彫刻が、息をしているかのような胸像が、
汚れた土の中から救出された柱が―
奴隷の家郷にはあまりに眩しく、美しいため、

エーゲ海にちりばめられた宝石のような島々から
征服者たるヴェネツィアへともたらされ―見事な戦利品とともに、
宮殿や教会を飾りたてた。（「ヴェネツィア」, 55-63 行）

そして故郷の岸辺からテヴェレ川の流れへと、
アテネの彫刻家はパロス島の精華を風に乗せて送った―
生きているかのような彫刻と、つやのある円屋根は光を放ち、
ギリシアはローマで二度目の誕生を果たした。（「彫刻」, 55-58 行）

着目する時代と都市は異なるものの、「彫刻」の展開をなぞるように、ギリシアからイタリアへと彫刻がもたらされた経緯が「ヴェネツィア」において反復され、さらに「生き生きとした彫刻」（“the live statue”）、「生きているかのような彫刻」（“the life-like statue”）というように類似した表現も配置されている。このような一連の引用・参照行為からは過去の受賞者に対する敬意だけではなく挑戦的な意識も読み取れるところではあるが、いずれにしても、閉鎖的な世界に過度に依拠して詩作をしている点は否めない。「トンブクトゥ」におけるエピグラムの捏造は、このような環境を解体するための象徴的行為のように見えてくる。

5. おわりに

本論文では、テニスンの「トンブクトゥ」を、詩人としての模倣期の終焉を画する作品として位置づけ、そこにケンブリッジ大学における学生詩の流れから逸脱する新しい詩学の萌芽を確認した。なお、その過程において、テニスンが内輪の世界―「創作仲間・同人」（coterie）のなかでの詩作行為―から脱却したわけではなく、むしろ新たな内輪の世界に入っていった点については強調しておきたい。表面的な模倣や引用・参照により自家中毒気味だったケンブリッジの学生詩という空間から、使徒団という知的で、新しい時代の詩を求める情熱に燃えた「同人」空間にテニスンがまさに乗り換えようという出発点に「トンブクトゥ」は位置づけられるのである。もっとも、それはあくまで事後的に確認される経過であり、本作品の結末部分からは、まだ暗中模索状態にあるテニスンの苦悩も読み取ることができる。

そして私は
カルペの上にひとり取り残された。
月は沈み、あたり一面は闇だ！　（245-47行）

カルペとはジブラルタル、すなわち、テニスンが身をおくヨーロッパとトンブクトゥが位置するアフリカの境界線上の場所である。これは詩人としてテニスンが境界期、移行期にあったことも暗示しているのではないだろうか。暗闇のなか、孤独にたたずむ姿からは、満足のいく環境を求めつつもまだ十分な感触が得られていない詩人の屈託を見て取ることができるのである。この屈託がその後のテニスンの詩学においてどのように結実していくのかについては、彼の作品（とりわけ、1830年と1832年の詩集に収められた作品群）におけるハラムや使徒団の影響の軌跡をたどるなかで検討していく必要がある。今後の研究課題としたい。

---

[1] ロマン派以降の19世紀を代表する英詩人のひとり。1850年以降は、ヴィクトリア女王の桂冠詩人を務めた。代表作は、『イン・メモリアム』（*In Memoriam*, 1850）、『王の牧歌』（*Idylls of the King*, 1859-85）など。
[2] ケンブリッジ懇話会については、Allen, *The Cambridge Apostles: The Early Years* を参照のこと。
[3] Allen, *The Cambridge Apostles: The Early Years*, p.76
[4] Armstrong, *Victorian Poetry: Poetry, Poetics and Politics*, pp.27-28
[5] 歴史家ヘンリー・ハラム（Henry Hallam, 1777-1859）の子。早熟の天才として知られ、イートン校在校時は、後に首相となるグランドストーン（William Ewart Gladstone, 1809-98）との交友を育んだ。本文中にも記したとおり、ケンブリッジ大学では親友としてテニスンの詩作を支援した。将来を嘱望されていたが、1833年に旅行先のウィーンにおいて22歳の若さで急死する。テニスンの代表作『イン・メモリアム』は、ハラムの死を悼む哀歌である。
[6] アーサー・ハラムとの交友関係は1829年の春にはじまったようである。また、「トンブクトゥ」のケンブリッジ総長賞受賞後の朗読会を欠席することになったテニスンが、詩の代読をのちに使徒会員となるメリヴェイル（Charles Merivale, 1808-93）に依頼している点からも、すでに彼が使徒会ネットワークのなかにいたことがわかる。なお、Bachelor, *Tennyson: To Strive, to Seek, to Find* によれば、テニスンとメリヴェイルは1828年4月までには親しい間柄になっていたという（p.39）。
[7] H. Tennyson, *Tennyson: A Memoir by His Son,* i, p.46
[8] Chainey, *A Literary History of Cambridge*, p.149
[9] H. Tennyson, *Tennyson: A Memoir by His Son,* i, p.45
[10] A. Tennyson, *The Poems of Tennyson*, i, p.181

[11] C. Tennyson, *Alfred Tennyson*, p.76
[12] Batchelor による最新のテニスン伝(2012)にも、「テニスン本人は気乗りがしなかった」と書かれている(p.39)。
[13] A. Tennyson, *The Poems of Tennyson*, i, p.177
[14] Levy, *Tennyson*, p.48
[15] 西欧人によるトンブクトゥ探検史については、Sattin, *The Gates of Africa: Death, Discovery and the Search for Timbuktu* を参照した。
[16] テニスンの詩については、A. Tennyson, *The Poems of Tennyson* を底本とした。本論文に載せる英語文献からの引用は、すべて論者による訳である。なお、トンブクトゥが「屋根の低い、泥づくりの塀に取り囲まれた」場所であることについては、モロッコに拠点を置いた貿易商ジャクスン(James Grey Jackson)がアラブの商人からの情報等をもとに記したとされる 1809 年と 1820 年の著作において既に示唆されてはいるが、テニスンがそれらの本に触れる機会があったかどうかは不明である(「大部分のトンブクトゥの家には、2 階部分はない」(Jackson, *An Account of the Empire of Morocco*, p.255)、「トンブクトゥの町は泥づくりの塀で取り囲まれている」(Jackson, *An Account of Timbuctoo and Housa*, p.8))。また、ここでのテニスンの記述とカイエの旅行記の内容が見事に符合するのも興味深い(「[1828 年]4 月 20 日の夕方、神秘のトンブクトゥに入市し、私は喜びを抑えることができなかった。目の前の、黄みを帯びた白色の砂漠に囲まれた泥づくりの家々は、予想していた壮麗さや豊かさと合致しなかった。」(Sattin, *The Gates of Africa: Death, Discovery and the Search for Timbuktu*, p.346))。
[17] Mazel, "The Age of Rhyme: The Verse Culture of Victorian Cambridge", p.396
[18] *Ibid*., p.381
[19] テニスンがライン川地域を旅行中に、ケンブリッジの自室を懐かしんで創作した「おお、いとおしい部屋」("O Darling Room", 1832)もミルンズのソネットと似た視点をもっている(「だが、どの街でも、右を見ても左を見ても／かくも申し分ない小部屋を／見る機会はついぞなかった」(13-15 行))。
[20] ワーズワスの詩については、Wordsworth, *The Major Works* を底本とした。
[21] クリストファーは、伯父の死の翌年(1851 年)、伝記である *Memoirs of William Wordsworth* を出版している。
[22] Gill, *Wordsworth and the Victorians*, p.56 興味深いことに、テニスンの指導教員ヒューウェルも、1820 年代初頭に、ウィリアム・ワーズワスの人柄に感化されて「ワーズワス愛好者」(Wordsworthians)のひとりになったという。
[23] 「トンブクトゥ」以外の総長賞受賞詩は、すべて *Cambridge Prize Poems* からの引用である。
[24] ハラムの「トンブクトゥ」に見られるワーズワスからの影響については、Thomas, *Tennyson Echoing Wordsworth* が詳しい。
[25] ハラムの詩については、*Arthur Hallam, The Writings of Arthur Hallam* を底本とした。
[26] A. Tennyson, *The Poems of Tennyson*, i, p.188
[27] Sachs, *The Poetics of Decline in British Romanticism*, p.35
[28] マコーリー「ポンペイ」とテニスン「アルマゲドン」の展開に大きな違いがあるとすれば、それは「ポンペイ」においては都市の壊滅だけでなく、その後の自然の回復力についても語られている点であろう(「恐れるな、死のしるしが諸君を縮み上がらせることはなく、／すべてが美しく、緑に萌え、かぐわしい。／なだらかな斜面は運命の地を／香りのよい茂みと房をなす月桂樹で

覆っている」(「ポンペイ」, 205-08 行))。

[29] Paden, *Tennyson in Egypt: A Study of the Imagery in His Earlier Work,* p.144

[30] Tontiplaphol, *Poetics of Luxury in the Nineteenth Century: Keats, Tennyson and Hopkins,* p.81

＜参考文献＞

Allen, Peter. *The Cambridge Apostles: The Early Years*. Cambridge: Cambridge University Press, 1978.

Armstrong, Isobel. *Victorian Poetry: Poetry, Poetics and Politics*. London: Routledge, 1993.

Batchelor, John. *Tennyson: To Strive, to Seek, to Find*. London: Chatto & Windus, 2012.

Cambridge Prize Poems: Being A Complete Collection of the English Poems Which Have Obtained the Chancellor's Gold Medal in the University of Cambridge. Cambridge: W. P. Grant, 1840.

Chainey, Graham. *A Literary History of Cambridge.* Cambridge: Cambridge University Press, 1995.

Gill, Stephen. *Wordsworth and the Victorians.* Oxford: Oxford University Press, 2004.

Hallam, Arthur. *The Writings of Arthur Hallam.* Edited by T. H. Vail Motter. New York: Modern Language Association of America, 1943.

Jackson, James Grey. *An Account of the Empire of Marocco, and the District of Suse; Complied from Miscellaneous Observations Made during a Long Residence in, and Various Journies through, These Countries. To Which Is Added, an Accurate and Interesting Account of Timbuctoo, the Great Emporium of Central Africa*. London: W. Bulmer and Co., 1809.

Jackson, James Grey. *An Account of Timbuctoo and Housa, Territories in the Interior of Africa, by El Hage Abd Salam Shabeeny: With Notes, Critical and Explanatory. To Which is Added, Letters Descriptive of Travels through West and South Barbary, and across the Mountains of Atlas; Also, Fragments, Notes, and Anecdotes; Specimens of the Arabic Epistolary Style, &c. &c. &c.* London: Longman, 1820.

Kryza, Frank T. *The Race for Timbuktu: In Search of Africa's City of Gold*. New York: HarperCollins, 2006.

Levy, Peter. *Tennyson*. New York: Charles Scribner's Sons, 1993.

Martin, Robert Bernard. *Tennyson: The Unquiet Heart*. Oxford: Oxford University Press, 1980.

Mazel, Adam. "The Age of Rhyme: The Verse Culture of Victorian Cambridge", *Nineteenth Century Literature* 72-3 (2017), 374-401.

Paden, W. D. *Tennyson in Egypt: A Study of the Imagery in His Earlier Work.* Octagon Books, 1971.

Sachs, Jonathan. *The Poetics of Decline in British Romanticism*. Cambridge: Cambridge University Press, 2018.

Sattin, Anthony. *The Gates of Africa: Death, Discovery and the Search for Timbuktu*, London: HarperCollins, 2003.

Tennyson, Alfred. *The Poems of Tennyson*. Edited by Christopher Ricks. 2nd ed., Longman, 1987. 3 vols.

Tennyson, Charles. *Alfred Tennyson: By His Grandson*. London: Macmillan, 1949.

Tennyson, Hallam. *Tennyson: A Memoir by His Son*. London: Macmillan and Co., 1897. 2 vols.

Thomas, Jayne. *Tennyson Echoing Wordsworth*. Edinburgh: Edinburgh University Press, 2019.

Tontiplaphol, Betsy Winakur. *Poetics of Luxury in the Nineteenth Century: Keats, Tennyson and Hopkins.* Farnham: Ashgate, 2011.

Tucker, Herbert F. *Tennyson and the Doom of Romanticism.* Cambridge: Harvard University Press, 1988.

Wordsworth, William. *The Major Works*. Edited by Stephen Gill. Oxford: Oxford University Press, 1984.